

東北厚生年金病院

院長 藤村 重文

村上きみ子さまと偲ぶ

村上きみ子さまは平成十六年六月二十七日東北厚生年金病院にて享年七十一才九ヵ月で逝去されました。

村上さまが当病院に入院してこられてからわずか二十日間でしたが、その間、ご自分の病気に前向きに取り組む姿が印象的で、病室にお見舞いに伺ったときには笑顔を見せながら大変喜ばれておられた様子が思い出されます。

村上さまは昭和二十九年に左胸郭成形術を受けたと伺っていましたが、常日頃は大変姿勢がよく、手術をお受けになったとは思えないくらいで、酸素吸入されていることで漸く、呼吸障害がおありだということが判るといふほどでした。我々にはご自身の病気の気配をあまりお見せにならなかったのではないかと思われます。

昭和二十年代の呼吸器の病気は肺結核が多くを占め、その外科療法のひとつとして開発された胸郭成形術は、多くの方々が社会復帰されるのに役立ちましたが、一方ではその手術によって呼吸障害が残ることが大きな問題となりました。村上さまは肺結核を克服したのち、長い間、呼吸障害という日常生活を妨げる最大の難敵と戦いながら、前向きに次々と同じ障害を持つ方々のために活発に社会的活動を続け、多大な業績をあげてこられました。ここに満腔の敬意を表するものであります。

村上さまは二十年前東北白鳥会を設立し、それをもって呼吸機能障害者のための活動の起点としました。大きく羽ばたいてきた東北白鳥会は、いまや全国低肺機能者グループのなかでもぬきでた存在感のある団体であり、その活動によって多くの低肺機能者のための国の施策が実現されたのであります。私ごとながら、日本呼吸器外科学会総会（一九九六年）、日本肺癌学会総会（一九九七年）、日本胸部外科学会総会（一九九九年）などを仙台において主催しましたが、その都度村上さまと低肺機能の方々にとって必要な国の施策実現に向けての共闘の心を新たにしました。

徳島県における、白鳥会と同じような組織である徳島02会から常々会誌を送っていただいておりますが、それを拝見する度にわが国の低肺機能者のための運動がいまや大きく発展していることを実感します。

村上さまのお人柄は本当に人を引きつける大きさがありません。ご自分の難病とも戦いながら低肺機能者のために尽くされずばらしい方にもう二度とお目にかかれなうと思ふと悲しい限りです。

村上きみ子さまの御冥福とともに、東北白鳥会今後の益々の発展を心からお祈り申し上げます。

日本呼吸器学会 前理事長
順天堂大学 呼吸器内科 教授 福地 義之助

村上きみ子さんは、平成十五年秋に日本呼吸器学会が呼吸障害者団体連合を結成する際、中心メンバーとして、多大のご協力をいただきました。

ここに厚くお礼を申し上げ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。
村上さんの献身的活動は、今後もそのあとに続く人々の記憶に残り、勇気の源となつて決して忘れられないことがないでしょう。

東北大学大学院医学系研究科内部障害学分野

教授 上月 正博

「不屈の信念」と「一面の光」

私が東北大学の教授になって幾日もたない四年前の初夏に、村上さんから会誌「白鳥」とともに「白鳥会と呼吸障害者をよろしく願います。」という一通のお手紙をいただきました。村上さんは、自ら呼吸障害をかかえながら、不屈の信念をもって、宮城県や仙台市への呼吸障害者に対する福祉の充実を訴える、まさに時代を切り開く洞察力と行動力を兼ね備えた方でした。その結果、呼吸障害三級以上の医療無料化や酸素濃縮器の電気代助成など多大の功績を残されました。

村上さんの卓越した行動力、会員への気配りや愛情、関係団体と構築してきた深い信頼関係など、私が村上さんから学んだことは少なくありません。それを思うと、村上さんの御他界は、私にとりまして胸ふさがれる思いであり、深く哀悼の意を表するものであります。

私は白鳥会二十周年記念総会で「息切れとリハビリテーション・その理論と具体的対策」という題で講演する機会を得ましたが、その際村上さんは入退院を繰り返しながらの、万全とは程遠い体調であったにもかかわらず、常に「いつも天を駆ける駿馬のように高揚」した気持ちで、目を輝かせながら接してくださり、頭の下がる思いがしました。

これまで村上さんを襲った難題の多さは尋常ではなかったと思えます。しかし村上さんは、すさまじいまでの日々の努力や苦悩を他の人にはあまり明らかにしませんでした。村上さんは不屈の信念をもって行動され、呼吸障害者のためとあれば、誰

はばかることなき言動を常としてこられました。一方、白鳥会会員や賛同者に対しては、いつも希望に満ちた爽やかな笑顔で親切に應對されました。村上さんは、自分にあたえられた条件のもとで最善をつくし、人生に起こるさまざまの変化や機会を、樂しかろうと辛かろうと、堂々と迎えてこられました。そして、あたり一面に光をまき散らすように、周りの人々を勇気づけ、やる気を引き出させる名人でもありました。

二十年以上にわたる白鳥会の活動は、多くの成果を生んできました。今後も、村上さんのこれまでのご努力を忘れることはありません。村上さんの理念は今後も白鳥会のみならず、障害者団体や医療・福祉の担当者を受け継がれていくに違いありません。しかし、肢体不自由など他の身体障害に比較して、呼吸障害などの内部障害の認定や法整備はまだまだ十分ではありません。全国で唯一「内部障害」の名前がついた講座を主宰している私としても内心忸怩たるものがあります。われわれも、村上さんの目指された内部障害学医療・保険・福祉の発展に、いっそう努力を傾けていく決意であります。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

東北大学加齢医学研究所呼吸器再建研究分野

医学部付属病院呼吸器外科

教授 近藤 立

村上さんとの出会いは今定かには思い出せませんが、私の前任の藤村教授の時代からのお付き合いでしたので、かれこれ五、六年以上にはなるであろうと思います。私は、呼吸器外科医という立場であるために、内科的な治療を必要とする疾患をお持ちの方を普段診療する事はないのですが、呼吸不全といっても私が医者として活動を開始する以前に、主として行われていた結核に対する外科治療では、病氣そのものの影響にさらに手術の影響がプラスされて、呼吸不全になっている方が数多くおられ、村上さんもそういう方のお一人であるという事を、この東北白鳥会とのおつきあいを通じて知った次第です。

村上さんは、長らくその会長職を努めておられました。酸素を離せない状態とは思えない、バイタリティーにいつも驚かされておりました。私どもが日本における肺移植の第一例目を成功させた時も、真先にお祝いをファックスで送ってくださいました。あのようなお立場になっても、細やかな心配りを忘れない方でありました。肺移植といいますが、東北白鳥会の会員の皆様方にとりましては、おそろくなんら副音をもたらすようなことを期待できるものではないものであるにもかかわらず、

心から喜んで頂けたということは、同じ呼吸という事に問題を抱える人間が、一人でもその問題から開放される、ということに対して大きな共感と喜びを抱いていたのであろうと思う次第です。普段の活動は白鳥会を中心としたものではありましたが、その気持ちはもっと広いものを見つめていたように思います。

村上さんからは沢山の相談をされました。しかし、力不足の私には殆どの場合お話を聞いて差し上げるだけのことしかできなかったような気がします。彼女はそういうお話をしながら、実はどんどんとその先の道筋を自らの力で切り開いていったような気がします。そういう意味では、何のお役にも立てませんでしたことを心から申し訳なく思っています。彼女の活動を支援するどころか、逆に私の活動を彼女に支援していただいたことの方が多いかもしれません。仙台に自民党の安倍晋三代議士が来られた時などは、呼吸不全患者団体の代表という立場でのお願いをする席で、私に肺移植や、臓器移植に関する問題やお願いをお話する機会を設けていただけました。それがどれほどの実効力があつたかどうかは別として、さほどお役にも立てていない私に、肺移植という面で、そういう機会を与えてくださった事には今でも本当に感謝しております。

今回、ご病気のお話を本人からお聞きしたときは、さほど悪い状況であるとは考えておりませんでした。彼女の肺の状態では、手術を通常の人と同じに考えるわけにはいきませんが、最近の医療の進歩を考えますと、決して不可能ではないと内心思っておりましたので、積極的に治療に向かう事をお勧めしていたのですが、すでにそのような状況をはるかに通り越して病状が悪化していた事を後に知り、言葉がありませんでした。ご連絡をいただいて厚生年金病院へお見舞いした時は比較のお元気がそうに見えました。しかし付き添っておられる方や主治医の先生のお話を伺うと、その日はどういう訳かことのほか調子がいものの、実際は明日をも知れぬ状況であると伺い、何とも言い表せぬ気持ちになつたと思います。

それからまもなくして亡くなられた事をお知らせいただきました。直前まで、まだしなくてはいけない仕事があるので死ぬわけにはいかない、とお話されていましたが、まさにこの活動に対する彼女の情熱の深さを表しているものであります。仕事には決して尽きるものはありませんし、その仕事に邁進するものにとつては、区切りというものもあるようではないのが現実であろうと思います。彼女にとつては、今が区切りであつたと考えざるべきありません。これまで成し遂げてきたものは沢山あるはずですので、この辺を一区切りとして安らかにお休みいただければと願うばかりです。

心より御冥福をお祈り申し上げます。

東北大学加齢医学研究所呼吸器腫瘍研究分野

教授 貫和 敏博

「村上きみ子さんの身体が発するエネルギー・追悼によせて」

村上きみ子様の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

正直申して、私は村上様とは数回お話しした程度の出合いで、あれほど切実に訴えられた呼吸不全患者の、医療待遇改善に何のお手伝いもできていません。肺癌や肺線維症患者の重い臨床を目の前にして、呼吸不全は少し別の課題と認識していました。その自分が「お別れ会」で村上様の写真を目の前にして涙が止まらない。不思議な反応です。実は手伝いもできないのに、お願いをしたことがあります。加齢研での立ち話で、県庁に用事があるとおっしゃる村上様にお願いをしたのです。日本肺癌学会作成の学童用肺癌・禁煙ポスターを、宮城県においても中学、高等学校に配布し、将来の呼吸不全や肺癌の予備軍を防ぐことを訴えて下さい。こうお願いしたのです。

数時間後、県教育委員会から電話があり、御理解をいただいて配布が実現しました。本年六月には小、中、高校の先生方の前で禁煙のお話をする御縁となり結実しました。

村上様の活動を「お別れ会」のビデオで拝聴し、村上様のエネルギーを今更ながら認識しました。「行動しなさい。正しいことは何度でも訴えなさい。」こうした村上様の言葉に、私たちは理屈だけでなく、村上様の身体が発するあの猛烈なエネルギーに感応しているのではないか。そのエネルギーをまざまざと感じた私の内なるものが涙を流した。そんな風に「お別れ会」で思いました。

こうした御縁のあることは本当にありがたいことです。患者さんより遅れる医師の認識。村上様の渾身のエネルギーをどう生かし、伝え、実現するかが私どもの課題であります。

東北大学保健管理センター
 所長・教授 飛田 渉

「村上きみ子様との出会い、そして別れ」

村上きみ子様、長い間ご苦勞さまでした。

私が村上様と最初にお会いしたのは昭和六十年でした。丁度、在宅酸素療法が保険適用になった年ですが、故滝嶋 任教授の音頭取りで東北地方における在宅酸素療法の普及と呼吸不全に関する情報交換の場として、「東北地区呼吸不全対策協議会」を立ち上げるための準備をしている時期でした。私はこの協議会の事務局を仰せつかり、設立準備のために学外の先生方とのやり取りをしていた頃です。どこで情報を得たのか、携帯用の酸素ポンペをキャリアーで運びながら、自ら鼻カニューラによる酸素吸入をしながら、私を尋ねて来られました。

「先生。今度設立される呼吸不全対策協議会に私たちも会員として参加させて下さい。」と対策協議会への参加申込みでした。声に張りがあり、酸素吸入をされている方とは思えないぐらいに元気そうでした。今思えば空元気であったのです。当時大病院には通院されておられなかったので、病状の程については顔色からしか伺い知ることができませんでした。少々赤ら顔でしたが、酸素吸入をしていたのでむしろ血色は良いように思われたのを記憶しております。しかし村上様が、肺結核を患い、片肺を切除し、厳しい状態にあったと言ふことは後で知ることになりました。

既にこの時、村上様が中心となり呼吸障害という外から見えにくい内部障害にありながら、他の身障者より条件が不利であることを指摘され、自分達から社会に、そして行政サイドにその改善を働きかけようと患者様の団体「東北白鳥会」を立ち上げていたのです。呼吸不全対策協議会そのものは、医療関係者同士の啓発、情報交換を目的としていたため、患者様の団体としての参加は見合わせて欲しいとお断りしたのですが、村上様の熱意に押されて、年一回開催される講演会への参加には案内を致すことになりました。

翌年の昭和六十一年に第一回講演会が開催されて以来今年の三月で、講演会は十八回を迎えましたが、村上様は一度も休まずに参加されました。講演の内容をメモに取りながら、一生懸命聴かれておりました。また、自ら慢性呼吸不全の身にありながら、自分の体に鞭をうちつつ全国の患者会との交流、厚生省への呼吸不全患者救済のための陳情等、同じ呼吸不全に悩んでいる方々のために活躍されました。このような村上様のお姿を拝見致しまして、バイタリティーには大変頭が下がる思いでした。

つい最近では、東北白鳥会が厚生労働省から表彰されたということや、宮城県からは在宅酸素療法の患者さんに対するパル

スオキシメーターの購入補助がついたということを知りました。村上様はじめ東北白鳥会の方々の地道な活動が行政サイドより高く評価された結果と思われれます。

村上様が外来にいられた時には、いつも「東北は肺の病気に関する研究のメッカであるから、一生懸命やり、日本だけでなく世界のリーダーになって欲しい」と、私共を叱咤されました。本当に有り難いお言葉でした。そして、ことしの四月末ごろでしたか、五月二十九日に開催される東北白鳥会の総会に講演をしてくれとお電話をいただきました。

総会では「息をすることの不思議」という題で講演させていただきました。必ず出席するからと申されておりましたが、入院の身にあった村上様はドクターストップがかかり、会場にはお姿はありませんでした。後日心のこもった礼状が届き、村上様の懐の大きさを知りました。この時のやり取りが私との別れとなってしまいました。

村上様、明るくて愛くるしい村上様。来年十七年七月二十九日、三十日には、仙台で私が会長として日本呼吸管理学会を開催致します。呼吸不全で悩まれている患者様を少しでも支援できるように学会にしたいと思っております。

どうぞ安らかにお休み下さい。

そして天から私どもを叱咤激励して下さい。

合掌

東北大学加齢医学研究所呼吸器腫瘍研究分野

助教授 渡辺 彰

“追悼の辞・故 村上きみ子様へ”

村上きみ子様のご逝去の報に接し、愕然とすると共に深い悲しみを覚えております。

村上様は低肺機能の方々への公的医療補助を全く何もないところから立ち上げられ、全国的な運動へと発展させるという大きな功績がございました。患者様だけでなく我々医療従事者も皆等しく感謝している次第でございます。また、私どもが企画した学会や市民公開講座などへの白鳥会の会員の皆様が参加されるよう積極的なご協力も頂きました。厚く感謝しております。呼吸機能低下の方々への医療補助・福祉政策はまだまだ万全なものとは言えませんが、村上きみ子前会長の意思を受け継がれた後輩の方々が、必ずやきつと万全なものとしてくれることを信じております。最後になりましたが、村上きみ子前会長が安らかにお休み下さいますことを念じて哀悼の言葉とさせていただきます。いろいろとありがとうございました。

「村上きみ子さんのこと」

村上きみ子さんの突然の訃報には大変驚き、また、これまでに残された白鳥会での多くの業績を思うと、残念でもありません。

村上さんが私たちの診療所に通院することになったいきさつはこうです。私自身は呼吸器科医で、胃内視鏡検査は研修医時代に習っただけであり得意ではないため、同期の消化器内科のK医師に頼んで週一回きてもらっています。村上さんは、肝臓の關係でこのK先生に診てもらっていたようです。平成十三年の秋、K先生が私に、「村上さんという患者さん、ちょっと肝臓の調子が思わしくなくて、今度、週に二、三回注射のために通院してもらうことになった。大学に週に何度も通うのは大変だ。ついてはおまえのところまで注射してやってくれ」と言われました。私も、大学に勤務していた頃から、村上さんの白鳥会での活躍はよく聞いていましたし、私の担当ではありませんが大学の外来でお見かけしたことがあるので、もちろんOKしました。

彼女が初診で来院されたとき、「ああ、佐々木先生は、以前白鳥会のために、肺結核のお話を書いてくださった方ですね、大変勉強になりました」とおっしゃったのです。私は少し恥ずかしい気持ちになったことを覚えています。私自身も忘れていたことをきちんと覚えていくのださきり、しかもずいぶん前のつたなかつたであろう私の文章について、「勉強になりました」などといわれると、実力もないのに文章を書いた自分が恥ずかしく感じられたのです。

その後、二年半にわたり通院していただきました。その間、大病院や、国立仙台病院などに何度か入院されましたが、呼吸器学会やいろいろな研究会にも熱心に参加されました。また、仙台市はもとより中央のお役人や政治家ともよくお会いになり、呼吸器の病気で苦しむ人たちのために奔走されていきました。そういった努力の成果は本号でも紹介されているでしょうし、河北新報の「残照」にも詳しく記事になっています。いつか本誌にも書きましたが、ビル管理会社と交渉して、私のクリニックの前のロビーを全面禁煙にしてくださいましたのも、村上さんの功績です。

今年の正月、三十九度を超える高熱が出て、一時入院しましたが、退院してからも発熱を繰り返して、それ以来急速に体力が衰えていくのがわかりました。わたしの力ではいかんともしがたく、平成十六年三月二十七日が、私どものクリニックを受診された最後の記録になっています。ご自身がたくさんの病を引き受けられ、その苦しみを押し、患者さんたちのために努力され、しかも実効あるものにした村上さんの功績は、今後も白鳥会の名とともに賞賛を以て語り継がれるものと信じます。

ご冥福をお祈りします。

福田内科クリニック
院長 福田 陽一

“村上さんへの 追悼”

村上さん、本当に長い間ご苦労さまでした。

思えば、村上さんとの出会いは、白鳥会を立ち上げてまもなくの頃だったと思います。二十年近く前のことになりましたので記憶がはっきりしないところもあるのですが、多分当時の抗研S先生からの紹介だったように思います。一人の患者さんとして、又白鳥会のことあわせてみえられたように思います。

先生！と呼びかけられ、村上さんの笑顔に誘われて白鳥会の応援を引き受けてしまったようです。その後NHKで慢性呼吸不全と白鳥会の活動についての放映があり、記者の方が村上さんと一緒に取材に見えたりということもありました。今となつては前後を確かめることも出来なくなっていました。

外来では、患者さんと主治医というより、いつも話の中心は、医療行政にどう働きかけていくかということが殆どでした。熱くなる村上さんを私が強めるといふより、あくまで活動的な村上さんに押され放しというのが、本当のところでした。呼吸よりも肝臓の調子が悪くなってからは、本当に辛い様子でしたが平成十五年十二月まで私のところへ通院されていました。その後近くへ通院されるということになり、一度研究会でお会いしたのが最期になってしまいました。議論することもなくなり淋しい限りです。

村上さんは自分のことよりも患者さん全体の利益になるならばと、病をものともせず頑張ってきました。多くの事を教えていただいたと思っております。微力ですが白鳥会の為にお手伝い出来れば、村上さんああの笑顔で許してくれるかと思えます。村上さん、どうぞ安らかに休んで下さい。

国立病院機構 青森病院
名誉院長 東海林 文一郎

この度「白鳥」一六四号を拜見致しましたところ、村上会長さんのご逝去の報に接し大変驚きました。誠に心が痛みます。私がかつて、国立療養所の医師として長い間結核の治療に携わっており、後年は呼吸機能障害者に対する、在宅酸素療法の草分け的な仕事をやってきました。そんな関係で、東北白鳥会会長村上きみ子さん主導の、低肺者のための「白鳥」誌には大変関心を持っておりましたし、村上さんのご活躍には頭の下がる思いでした。本誌には一、二度投稿させていただいたこともあります。

私自身、昔、結核で肺切除を体験、後に気管支喘息を併発したため、現在では在宅酸素療法予備軍みたいな「息切れ」人間です。だから会長さんの死は人ごととは思えないのです。本当に痛ましくも残念なことでした。今はただ心からご冥福を祈るのみです。

宮城県保険医協会
理事長 郷家 智道

東北白鳥会会長村上きみ子様の突然の逝去の報に接し、心からお悔み申し上げます。村上会長の生前の御活躍と、自らの病身を押し多く呼吸機能障害者のために、生命を懸けて運動されたことに心から敬意を表します。

宮城県保険医協会は、県内の医師、歯科医師の一七〇〇名会員を擁し、県民医療を守る諸活動を行っております。村上会長との出会いは、二〇〇二年十月の老人医療改定に伴う自己負担増によって、在宅酸素療法の中断事例が多発しているところから、厚生労働省に「負担増を元に戻して医療制度改善を」求めて運動を行っているときでした。当事者としての患者の実態を教えていただきたいと村上会長との懇談がきっかけでした。その運動の中で、村上会長から、医師と患者が一緒になって「呼吸機能障害者の救済助成」の実現と、在宅酸素療法中断患者の増加についての改善を厚生労働省に迫り、実現できるような大きな力になっていただきたいとお話がありました。

また、保険医協会に対して村上会長は、①在宅酸素療法患者実態と要望への理解を広げてほしい。②保険医協会としても国・

自治体に働きかけてほしい。③講演会の参加や白鳥会の賛助会員になっていただける方を紹介して欲しい。④ボランティアの支援活動に参加して欲しいとの要望が寄せられました。

保険医協会では、早速理事会で村上会長の意向を全面的に支援することを了承し運動を推進してきましたが、その途中で逝去されたことは誠に残念でなりません。

村上会長の意志を継いで進められている東北白鳥会の活動や、呼吸機能障害者の自治体助成や制度改善の運動を、さらに大きくして行くことを期待し、引き続き共に努力していく決意をのべ村上会長の御冥福をお祈りいたします。

仙台循環器病センター 呼吸器科

部長 岡山 道子

東北白鳥会 会長 村上きみ子様のご逝去をいたみ心よりお悔み申し上げます。

呼吸不全に苦しむ方々のために、村上会長がご自身も呼吸障害をかかえながら、長年にわたり献身的な活動をしてこられたことに、深く敬意を表します。

呼吸障害に悩む方々の苦しみが、少しでもやわらぐよう医療、生活環境を更に充実させるために、皆様が村上会長の御遺志を引き継がれ、いっそう白鳥会を発展させられますことを祈念いたします。

全国低肺機能者団体 徳島O2会
 名誉会長 湯浅 喜三夫

去る六月二十五日、入院中だった私のところに村上さんより電話を頂きました。その時の電話はいつに無い元気な声で、日本呼吸器疾患患者団体連合会の話や、お互いの容態について話し、励ましあったのです。それが村上さんとの最後の会話になってしまいました。そして六月二十七日大友さんより悲しい、残念な知らせを受けたわけでもあります。

村上さんのおつき合いは、東北白鳥会と徳島O2会が姉妹会の縁を結んだのが始まりでしたから、十八年目になろうかと思えます。低肺患者の救済のために、各関係機関への要望や働き掛けをしたり、常に情報交換をして交流を深めて参りました。個人的にも、お互いの闘病生活の助言や励ましの連絡をとりあって、大きな支えを頂いて参りました。村上さんの功績一つ一つが今更ながら大きなものであったと、思い返しております。本当にご苦勞様でした。

これからも村上さんの意志を受け継ぎ、低肺患者の救済のため、微力ながら力を尽くしたいと思っておりますとはいえ、昨今厳しい諸制度改革や患者会員の高齢化など前途多難であります。今後も東北白鳥会と徳島O2会との姉妹会のご交際を賜り、今まで通りまたそれ以上大きな結束をはかり、働きかけて行きたいと思っておりますので、皆様のご協力ご理解を賜りたいと存じます。よろしくお願い申し上げます。

最後に村上さんの尽力に感謝して、心よりご冥福をお祈りしましてお別れの言葉にいたします。

横浜市もみじ会
 会長 齋藤 勝廣

今から五年前の平成十一年九月、大阪市に於いて開催された政令指定都市身体障害者福祉団体連絡協議会で、私は初めて故前村上会長と出会いました。そこから私は、呼吸器機能障害者団体の活動のノウハウを、村上前会長から教わることになるのです。

この協議会では、私達呼吸器障害者団体は内部障害者部会に所属し、その中で提出議題を協議することになっていて、村上

前会長もお二人の付添いの方と出席されました。

仙台から提出された議案「呼吸器機能障害者に係わる日常用具（パルスオキシメーター）を拡充してください」と言うものでした。この頃横浜市もみじ会でも、パルスオキシメーターの必要性は知っていたものの、これを呼吸器障害者の日常生活用具に指定して欲しいと言う発想はなく、大変驚いた記憶があります。

しかも、この部会での村上前会長のご発言は、呼吸器障害者に対する福祉施策の立ち遅れの実情を、切々としかも論理的に訴えられました。

その後の前会長と私との交流が、東北白鳥会と横浜市もみじ会という団体相互の交流に発展し、情報交換をすると共に、一緒に活動を進めることになるのですが、驚いたことに横浜市もみじ会が、何年も前から行政に要望していた呼吸器機能障害者の療護施設が、仙台市では、既に呼吸器障害者を含む内部障害者の療護施設が完成していて、私も見学させて頂きました。又、パルスオキシメーターが、平成十五年度から全国に先駆けて仙台市の単独事業として、呼吸器障害者の日常生活用具に指定され、購入の際補助金が支給されることになったと聴き、村上前会長の政治力の大きさと、先見の目の確かさに感心させられました。

又、人脈も幅広く、国会、県議会、市議会の先生を始め、医学会の多くの先生方とも深い交流があって、その活動の広さを感じさせられました。一昨年、仙台市で日本呼吸器学会が開催された際、早速ご案内を頂き、神奈川もみじ会の小川会長と共に仙台市を訪問しましたが、徳島県から見えられた徳島02会の湯浅会長と四人で、呼吸器学会会長へ陳情書を提出したこともありました。

昨年日本呼吸器学会の指導で「日本呼吸器疾患患者団体連合会」が結成されましたが、東北白鳥会から村上前会長が役員に選ばれ、ワーキンググループのワーク2（医療環境）のリーダーに推薦されました。今年からその作業部会での活躍を期待していたのですが、力を発揮される日を目前にして、帰らぬ人となりました。ご本人もさぞかし残念であったらうと、推測しています。

「斎藤さん。私達の目の黒い内に、呼吸器障害者が安心できる環境作りの為に、頑張りましょう。」と電話の向こうからの声が今でも耳に残っています。

村上前会長のご冥福をお祈りします。

北海道低肺の会

会長 三澤 康二

役員 一同

昨年六月に当會長吉野安太郎が急逝し、村上きみ子會長より追悼文を頂戴しました。

内容は吉野會長とは姉妹会として親しく交流しいながら、低肺運動で業績を重ねてきたことを書いて頂きました。しかし、村上會長を存じあげる当会の執行部は病状悪化でリタイヤし、本年五月総会で新体制が決まってこれから貴会とも連携して、村上きみ子會長からもご指導を仰ぎながら、活動運営をして行こうとしていた矢先に、村上會長の病状悪化入院。そうして間もなくご逝去のニュースが入ってきました、気の抜ける思いをいたしました。

貴白鳥会は村上會長の指導力のもと、一丸となって低肺医療改善運動に取り組んでいた姿勢は、貴会発行の「白鳥」を読んだ、私達は何時も敬服し、その活動力、エネルギーに感服していました。村上會長は闘病しながら、ひたすら患者会のため尽力し、エネルギーを燃やし尽くし走り続けました。本当に長い間お疲れさまでした。どうぞ安らかにお休みください。ここに深甚なる弔意を捧げさせていただきます。

福岡呼吸不全友の会

会長 大隅 迪

七月二日、全国もみじ会の久保隅前會長から、「村上會長が亡くなったそうだ。」と電子メールが届きました。

しかし、俄には信じられませんでした。というの、当の村上さんから「新しく発足した日本呼吸器疾患患者団体連合会の役員会で、医療環境の評価に関するワーキンググループのリーダーに決まった。」と、六月十五日付けの郵便が届いたばかりで、近く電話をしようと思っていた矢先だったからです。

仙台市を活動の拠点とする「東北白鳥会」と九州福岡の私共の会が、北と南に遠く離れながら交流を深めるようになったきっかけは四年前のことです。仙台市障害企画課に日常生活用具給付事業実施要綱の患贈依頼の橋渡しを、村上會長にお願いしてからでした。

その時の誠実な対応に感謝し、折ある毎に、三十分を超える長電話をしては情報交換をしていましたが、昨年九月、北九州
市で開催された政令指定都市身体障害者福祉団体連絡協議会に出席される機会を利用して、福岡にお立ち寄り頂いて、市近郷
の歴史の街太宰府の古刹観世音寺や、学問の神様菅原道真を祭る太宰府天満宮を案内しました。

今にして思えば、この時が最初で最後の出会いになりましたが、あのエネルギーギッシユな姿は何時までも忘れることができま
せん。

訃報に接し、私の胸には二つの思いが去来します。その一つは、日本呼吸器学会患者団体連合会のワーキンググループのリ
ーダーとして、今後のご活躍を期待する思いです。もう一つは病を得てからの後半生を低肺患者の希望を持たせる活動に、持
ち前の情熱を注いで燃え尽きられました。仏語の教える生老病死は宿命で、人の力ではどうにもならないもの、天に迎えられ
て安らかにお眠り下さい。との思いです。

聞き及ぶところによりますと、東北白鳥会は既に会長も決まって、村上会長のご遺志は引き継がれるとのこと、これからも
よろしく交流のほどをお願いします。

徳島市 樫本 淳子

さる七月三十一日夜、徳島O2会名誉会長 湯浅喜三夫様から村上きみ子様が御逝去された訃報の知らせで、突然の電話に
しばらく絶句致しました。心から冥福をお祈り申し上げます。

低肺患者救済で、仙台市との縁組で「東北白鳥会」と姉妹締結書に調印したのが、昭和六十一年八月十五日で阿波踊り最終
日でした。私は村上様にゆくり過ごして戴けなくて大変残念だった事が忘れられません。開設二十一年間の永い年月
を、ご自身の体調も省みず、呼吸器機能障害者のために献身的に、不死身の活動を続けられるお姿を頭の下がる思いで遙か彼
方よりご活躍を見守って来ました。長い間お疲れ様でした。どうぞ安らかにお眠り下さい。 合掌・・・